

「国語」の出題の意図

国語の問題は、高等学校までに培った総合力を判定することを目的として、文科・理科を問わず、現代文・古文・漢文の三分野すべてから出題されます。選択式の設定では測りがたい国語の主体的な運用能力を測るため、解答はすべて記述式としています。なお、文科・理科それぞれの教育目標と、入学試験での配点・実施時間をふまえ、一部に文科のみを対象とした問いを設けています。

第一問は、現代文の論理的文章についての問題です。今回は田中彰吾の文章を題材としました。幼児の鏡像理解獲得の過程のあり方、そこにおける他者の視点の必要性を論じた、具体的論述と抽象的論述の両方を具備する文章を正確に理解する読解力と、それを簡潔に記述する表現力が試されます。また、ある程度の長文で、全体の論旨をふまえつつまとめる表現力を問う問題も設けました。

第二問は、古文についての問題です。鎌倉時代の『撰集抄』を題材としました。古文の基礎的な語彙・文法の理解をふまえ、極限まで世を厭う生き方を貫く僧の、一見異様にも思える生き様と、それに対する周囲の人々の心情が文章に沿って理解できたか、また和歌表現が理解できるかを問いました。文科ではさらに、話の鍵となる箇所を理解を問う問題も出題しました。

第三問は、漢文についての問題です。今回は明の雲棲株宏の『竹窓二筆』を題材としました。漢文の基礎的な語彙・文法をふまえ、「執着」の両面性をめぐる筆者の考えが文章に沿って理解できたかが問われます。文科ではさらに、比喩表現の内容を説明する問題も出題しました。

第四問は、文科のみを対象とした、文学的内容をもつ文章についての問題です。今回は佐多稲子の小説を題材としました。夫と妻、また植木屋のそれぞれの思いと、お互いへの気遣いといった、言葉の背後にある心情を繊細にくみ取る人間理解に根ざした読解力と、それを簡潔かつ的確に表現できる力を問いました。